

二 神 楽

神楽の特色と種類

神楽は、清め、払い、鎮魂をして、人々の衰えた魂を復活させて長寿を祈るため、神聖な場所に神座（かむくら）を設け、神を迎えて行われた神事に発したといわれている。

神楽の最古のものは、宮廷の御神楽であるが、これに対して地方のものを里神楽といい、巫女神楽、出雲流神楽、伊勢流神楽（湯立て神楽）、獅子神楽の四種に大別できる。

巫女神楽

いわゆる神の妻である巫女は、神座を神懸りしてめぐり神の託宣をした。これが後になって洗練され、形式を整えたのが巫女神楽である。県内には、このような古風なものは少なく、「浦安の舞」などの新作の舞が伝えられているが、現在、川内村に伝えられている浦安の舞は、紀元二六〇〇年（昭和十五年）を記念して上川内・下川内の諏訪神社に奉納されているものである。

出雲流神楽

出雲（島根県）の佐陀神社の御座替祭には、七座の神楽（採物舞）が古くから行われていたが、後に、当事流行していた猿楽を取り入れて、神話や縁起を題材とした神能も演じるようになった。これが出雲流神楽の起りりで、本県のは関東の土師流神楽の系統といわれる。多くは、「太々神楽」といい、一部に「十二神楽」「大和舞」とも呼ぶ。演目は「白杖」「小弓」「太刀舞」など素面の採物舞